余はいかにして 生物物理学徒と なりしか

巻／頭／言

コロナ禍においても生物物理学徒の諸兄におかれましては、慌てず動じず学究の道を歩んでおられることと拝察いたします。生きるとか死ぬとか年を取るといのはいったいどういうことなのかを物理学的に納得したいと幼少時から望んでいる（いた、ではない。今も悪戦苦闘中である）私は少なくともそうです。

生物物理学に最初に明示的に出会ったのは京大の沼研に遊びに行ったりしていた高校二年生の初夏です。奥田先生という先生の下、現在も大変お世話になっている岡田康志先輩らとファインマン物理学を読んだりしておりました。岡田先輩が模擬試験で全国一位だったそのとき、物理だけは高二の私が一人満点で岡田先輩の全教科トップを妨害してしまうという珍事があり、私は物理学を意識するようになっていました。一方、京大にトップ合格しておきながら湯川研で苦勞していた叔父を身近で見ていた数学畑出身の私の母は、受験勉強と研究は違う、と私の理学部進学に反対しておりました。その頃、岡田先輩から、生物物理という学問があり、東大医学部で盛んだという話を聞いて、それはよさそうだったのが転機の一つになりました（今思えばどうやら江橋先生や堀田先生のことだったようです）。

その後、私は廣川先生岡田先生に医学部で、江橋所長永山先生に生理研でお世話になって、現在地方国立大学の医学部で解剖学を教えて早13年になります。あと15年はあるようなのでもう少し足掻いてみようと思っております。今年は量子技術をテーマに量子光学計測、量子波面操作、固体量子センサー、陽電子、スピン制御と検出、核偏極、量子ビーム、重粒子線、量子エンタングルメント、量子コヒーレンス、量子コンピューター、量子通信、のシリーズ講義を大学院で行いました。ご賢察の通りほとんどがQLeap やさきがけ量子生体の関係の外部講師で生徒は大学院生というより私です。講師の先生方にこの場を借りて感謝いたします。

こうして振り返ると、17歳の自分が生物物理学に出会う場となった盡己塾を用意した奥田先生の偉大さが改めて身に沁みます。そういえば師匠の師匠の和田先生も高校の顧問をされておられました。これを機に、今後は大学院だけでなく大学一年生の授業、機会を作って高校生にも、生物物理学と出会う機会をさらに提供していきたいと思います。巻頭言のご指名ありがとうございました。

瀬藤光利, Mitsutoshi SETOU

浜松医科大学細胞分子解剖学講座, 教授

国際マスメーキングセンター, センター長